

『今古奇観』諸本考補遺

—本衙蔵板本・書肆不明本管窺—

丸井貴史

はじめに

短篇白話小説集「三言二拍」の選集である『今古奇観』について、筆者はかつてその諸本の概略的な整理を、「『今古奇観』諸本考」と題する論考（以下「前稿」）において行った¹。まずは、その内容をあらためて以下に整理しておく。

『今古奇観』の諸本は数十種に及ぶが、それらは書型によつて初期刊本と後期刊本に大別し得る。初期刊本はおよそ縦二十四〜二十六糎・横十五〜十七糎の大型刊本で、そのうち成立が最も早いと目されるのは、フランス国立図書館所蔵の宝翰楼本（CHINOIS 4259/4262）である。その後、眉批の削除や板式の変更を伴う本文の校訂を経て東大本（東京大学総合図書館所蔵〈A00-5950〉）が成立し、そこから派生するかたちで、上海本（上海図書館所蔵〈21356-79〉）・金谷園本a（九州大学文系合同図書館室所蔵〈支文/37B/11〉）・文盛堂本（北京大学図書館所蔵〈MX/813.26/40484〉）・同文堂本a（北京

大学図書館所蔵〈MX/81326/40481〉・崇文堂本（京都大学文学研究科図書館所蔵〈D/V1a.93〉）等が生み出された。上海本以下五種は同系統の刊本とみなし得るが（したがって、以下「上海本系統」と称する）、巻によっては若干の異同が確認される。また、東大本からはさらに文徳堂本（国立国会図書館〈10033〉等所蔵）・国家本（中国国家図書館所蔵〈18217〉）の系統も派生したが、こちらは上海本の系統に比して誤刻が多い。一方、後期刊本は縦十六〜十八種・横十一〜十二種前後の小型の刊本で、維経堂本（早稲田大学図書館〈21/2757/1-10〉等所蔵）や萃精英閣本（国立公文書館内閣文庫所蔵〈30317〉）をはじめ、数多くの異本が存する。これら後期刊本は、初期刊本に比して每半葉あたりの文字数が多いことに加え、本文に誤刻が多く、口絵が稚拙で、低級な料紙を用いているのが特徴である。

初期刊本から後期刊本への過渡期に成立したと思われるのが、同文堂本b（北京大学図書館〈X/81326/5048〉等所蔵）と同文堂本c（首都図書館〈甲三/33〉等所蔵）である。cはbにおける各篇の排列を一部変更した刊本で、版面は酷似しているが、本文・口絵ともに異板。両者は書型が初期刊本と共通する一方で、板式はまったく異なり、本文にも誤刻が多い。その本文には後期刊本と共通する箇所も散見し、影響関係の存した可能性を窺わせるが、異同も多く見出され、具体的な関係性についてはいまだ不明と言わざるを得ない。ちなみに同文堂本cの影響を受けて成立したとみられる刊本が東京大学東洋文化研究所（倉石文庫/41798）と九州大学附属図書館高瀬文庫（漢・集部/26）に存しており、両者の封面には「乾隆甲辰重鐫」とある。これに従えば、同文堂本b・cの成立は乾隆四十九年（一七八四）以前となる。

これらに加え、収録作品が一般的な『今古奇観』とは異なったり、本文に大幅な改変が施されていたりする、「別本系諸本」と称すべき一群がある。

以上が前稿の概要であるが、この論考で検討の俎上に載せたのは、一部の例外を除いて書肆が明らかかな刊本のみであった。それは全体の見取図を描くためのやむを得ない処置であったが、伝本の中には書肆が明らかでないものも多くあり、

それらについての考察を経ずして、全貌の把握に近づくことは不可能である。そこで本稿では、筆者がこれまでに調査し得た諸本のうち、前稿において言及することがかなわなかったものの書誌を紹介し、若干の追考を行うことで、『今古奇観』諸本研究の一助としたい。

本衙蔵板本

唐本には、封面に「本衙蔵板」と刻された刊本が少なからず存する。「衙」は役所の意であるが、注意しなければならぬのは、これを一概に官刻本と断ずることはできないということである。

たとえば『皋鶴堂批評第一奇書金瓶梅』は、張竹坡が批評を附して刊行したことで知られる刊本であるが、王汝梅によってその初刻本と指摘された大連図書館所蔵本の封面には、「彭城張竹坡批評金瓶梅／第一奇書／本衙蔵板翻刻必究」とあるという。¹⁾しかし、周知のとおり『金瓶梅』はしばしば禁書となった小説であり、それが官刻されることなどあるはずがない。そもそも官刻本の白話小説というものの自体、存在を想定し得ないのであるが、その一方で、封面に「本衙蔵板」とある白話小説が少なからず存することもまた事実で、試みに大塚秀高『増補中国通俗小説書目』（汲古書院、昭和六十二年）を調べれば、短篇集に限っても、『酔醒石』『人中画』『都是幻』『西湖拾遺』『美人書』などに本衙蔵板本のあることが確認される。

では、白話小説における「本衙蔵板」の意味するところは何か。沈律によれば、官刻本・私刻本・坊刻本のいずれにも封面に「本衙蔵板」と刻す刊本が存在するが、小説の場合は坊刻本と考えるべきであるという。前述のとおり官刻はあり得ず、また沈自身も述べるとおり、作品によっては数十巻にも及ぶ大部の小説を私刻することも考えがたいことからすれ

ば、妥当な見解というべきであろう。そして書坊が自らの刊行物を「本衙藏板」とする理由については、「紅樓夢」の場合を例示しつつ、以下のように指摘する。

之所以書坊也打着「本衙藏板」的旗号、不敢亮出自己的招牌、或是意欲不想惹出什麼官司是非来、随便找個「本衙」来应付一番。因此、「本衙藏板」、似不排斥也有書坊刻書藏板牟利的成份。⁵⁾

(書坊もまた「本衙藏板」の名義を用いたのは、自らの店名を明示しにくかつたか、あるいは何らかの裁判沙汰になることを避けたかの理由があり、「本衙」の名称をもつてそれに対応したのである。したがって、「本衙藏板」の名義は、書坊が利を得るために使用したものであるという可能性を排除することはできない)

ここに言う「牟利的成份」として具体的にどのようなことが想定されているのかは不明だが、たとえば自らの正体を「本衙」の名義によって隠した上で、他の書肆の刊行物を無断で翻刻して出版する例などが考えられようか。いずれにしても、白話小説の版元としての「本衙」が一般の書坊であることは疑い得ないようである。そして『今古奇観』にも、複数の「本衙藏板本」が存在する。

中でも最初に触れておかねばならないのが東大本である。書誌は前稿にも記したが、以下にあらためて示しておく。

東大本

東京大学総合図書館所蔵(A00-5950)。十六冊。二五・六×一六・八糎。封面「墨憨齋手定／今古奇観／本衙藏板」。
口絵①二十丁(各巻二図、每半葉二図)、②八丁(每半葉一図)、③十丁(各巻一図、每半葉二図)。口絵②と③は手書きで後補されたもの。③は会成堂本a(早稲田大学図書館〈21/02747/1.16〉等所蔵)の口絵の模写。每半葉十一行×二十三字。匡郭二一・二×一四・七糎。

冒頭にも述べたとおり、上海本系統に先行して成立したと考えられる初期刊本である。口絵は①が本来附されていたも

ので、各巻二図・毎半葉二図の体裁は後統の初期刊本に踏襲された。右に述べたように、口絵③は会成堂本aの口絵を模写したものであるが、全四十巻のうち十二巻分のみが描かれる口絵②の図柄は、管見の限り他の刊本に見られず、現時点では出処不明と言わざるを得ない。

前稿に言及したものとしては、別本系諸本に分類した「奇観纂腋」も本衙藏板本である。こちらも前稿と重複するが、あらためて書誌を示す。

奇観纂腋

北京師範大学図書館所蔵(8574.301.6)。二冊(端本)。二三・二×一六・八糎。封面「墨憨齋手定／今古奇観／纂要／本衙藏板」。無図。毎半葉十行×二十字。匡郭縦一八・九糎(横寸未計測)。

封面題「今古奇観纂要」、目錄題「奇観」、柱刻題「奇観纂腋」で、改装表紙の左肩に「奇観纂腋」と印字された単辺題簽が貼付されている。内容は「今古奇観」から十六篇を抄出したもので、目錄によって収録作品を示せば、巻一「両県令競義婚孤女」、巻二「滕大尹鬼断家私」、巻三「裴晋公義還原配」、巻四「杜十娘怒沈百宝箱」、巻五「女秀才移花接木」、巻六「王嬌鸞百年長恨」、巻七「念親恩孝女藏兒」、巻八「蒋興哥重会珍珠衫」、巻九「喬太守乱点鴛鴦譜」、巻十「陳御史巧勘金釵鈕」、巻十一「錢秀才錯占鳳凰儔」、巻十二「徐老僕義憤成家」、巻十三「崔俊臣巧合芙蓉屏」、巻十四「誇妙衛丹客提金」、巻十五「老門生三世報恩」、巻十六「看財奴刁買冤家主」となる。ただし巻六く十六は失われており、現存するのは巻五までを収める二冊のみである。

その他、現在までに筆者が実見した本衙藏板本には以下の三種がある。

北京大本A

北京大学図書館所蔵(MX/81326/40485)。十六冊。二四・〇×二五・五糎。封面「墨憨齋手定／今古奇觀／本衙藏板」、欄外上辺「繡像」。口絵二十丁(各巻二図、毎半葉二図)。毎半葉十行×二十字。匡郭一九・三×一三・七糎。

口絵は上海本系統の初期刊本と同内容のものであるが、本来の序文にある「皇明」の「皇」字は削除されており、清刻本であることは疑い得ない。板木の摩耗により板面の状態はきわめて悪く、料紙も低級であることに鑑みれば、清末ごろの印行ではないかと思われる。本文には誤刻が多数見られ、板木の作製はかなり杜撰なものであったようである。

北京大本B

北京大学図書館所蔵(MX/81326/40487)。八冊(端本)。一三・二×一四・九糎。封面「墨憨齋手定／今古奇觀／本衙藏板」。無図。毎半葉十行×二十字。匡郭一九・三×一三・六糎。

巻二十一〜四十が失われており、本来は十六冊本であったものと思われる。書型はやや小ぶりではあるものの、初期刊本とほぼ同様。ただし料紙の質がきわめて低級であることに鑑みるに、印行は清代後期であろうか。一方、序文にある「皇明」の文字は擡頭しており、板木の作製が明代であった可能性は否定できない。

東洋文庫本

東洋文庫所蔵(TV/8・B/20)。十六冊。二五・六×一六・五糎。封面「墨憨齋手定／今古奇觀／本衙藏板」。無図。毎

半葉十一行×二十三字。匡郭二一・三×一五・〇種。

書型・板式ともに典型的な初期刊本である。前稿では卷三・二十七・三十三を調査対象として、上海本系統と東大本の異同を八箇所指摘したが、本書の本文はすべて東大本に一致する。「本衙蔵板」とされた二種の刊本が共通する本文を有している以上、両者の関係性にはきわめて近いものがあると思われるべきであろう。同板・異板の別については、詳細な調査を行っていない。

なお、本書には「千葉蔵書之印」「養閒齋蔵書記」という二種の蔵書印が捺されている。後者については不明であるが、前者は翻訳家千葉菊香（鉞蔵）の印である。

『増補中国通俗小説書目』によれば、北京大学図書館に収められる馬廉旧蔵本の中に、二種の本衙蔵板本が存するという。それらの書誌はそれぞれ「一〇×二〇 円図」二〇葉 宝翰樓刊本の翻刻。但し図は二段に改める、「存卷一至二〇 一〇×二〇 無図」と記されており、右に挙げた北京大本AとBがそれに該当するものと思われる。また、同書は「荷蘭漢文研究院蔵本衙蔵板は行款など不明。一〇行二〇字本の可能性もある」とするが、これについては筆者未見である。

書肆不明本

『今古奇観』の諸本には書肆が明らかでないものも少なくない。書肆が明らかかな刊本であれば、『増補中国通俗小説書目』や崔溶澈・朴在淵「韓国所見中国通俗小説書目」（『中国小説絵模本』、江原大学校出版部、一九九三年）等に多くが著録されているが、書肆不明の刊本については、所蔵機関についてさえ明らかでないことが多い。筆者の調査も一部の機関に

限られており、きわめて不十分なものはあるが、ひとまずこれまでに実見し得た刊本の書誌を以下に示す。

上海図書館本

上海図書館所蔵 (21356-79)。封面欠。口絵二十丁 (各巻二図、毎半葉二図)。毎半葉十一行×二十三字。匡郭二一・一×一四・六糎。

前稿において「上海本」と称したものである。本書は実見がかなっていないが、『古本小説集成』(上海古籍出版社)第三輯第四〜七冊に影印されており、袁世碩による解題が備わるため、参考のためここに掲げた。冊数と表紙の大きさについては解題に明記されていないが、系統を同じくする他の刊本に鑑みるに、全十六冊で二六・〇×一七・〇糎前後であることは確実であろう。また、袁は解題にて「序中皇明二字亦另行拾頭、知亦刊於明末或明刻清印」と述べ、本書が明刊本または明刻清印本であることを指摘する。

本書の詳細については前稿を参照されたいが、本稿冒頭にも述べたとおり、金谷園本 a・文盛堂本・同文堂本 a・崇文堂本と同系統であること(ただし巻によつてはわずかに異同があり、全巻が同板とまではいえぬ)、そして巻三の第二十一・二十二丁など、一部に異板が混在していることを、ここにあらためて記しておく。

国家図書館本 a

国家図書館所蔵 (J8217)。十六冊。二八・四×一七・四糎。封面欠。口絵四十丁 (各巻二図、毎半葉一図。円図)。毎半葉十一行×二十三字。匡郭二一・八×一四・八糎。

前稿において「国家本」と称した初期刊本である。善本に指定されており、実見が許可されなかったため、内容はマイ

クロフィルムによって確認した（右の書誌情報は、司書の方に測定を依頼したものである）。原本未見のため詳細は不明だが、マイクロフィルムでは巻十九の十一丁裏と十二丁表ならびに十二丁裏と十三丁表の画像がそれぞれ一枚ずつあり、第十二丁は表裏ともに手書きの文字である。また、巻一の本文は失われている。

前稿でも指摘したとおり、本書ときわめて近い関係にあると考えられるのが文徳堂本である。序・目録の板式や口絵の図柄形式（円図）はすべて両者間で一致しており、本文部分の版面も酷似している。また、巻十九「俞伯牙摔琴謝知音」の十丁裏一行目、東大本や上海本系統において「先生到鍾家要訪何人」となっている箇所は、本書や文徳堂本では「先生」の二文字が削除され、そのスペースに「老者又／問先生」の六文字が割書されている。このような処置が施されている刊本は、管見の限り他にない。なお、本書が東大本に基づいて新刻されたものである可能性が高いことも、すでに前稿において述べているので参照されたい。

国家図書館本b

国家図書館所蔵（XD4903）。十六冊。二五・三×一五・五糎。封面欠。口絵二十丁（各巻二図、每半葉二図）。每半葉十一行×二十三字。匡郭二〇・九×一四・五糎。

書型・口絵・字様いずれも、東大本および上海本系統とよく似た特徴を持つ刊本である。本文の詳細な調査は行っていないが、本書は巻三十二の七丁裏六行目に「化爲氷水」の一節を有し、これが東大本では同じく「化爲氷水」、上海本系統では「化爲氷水」であることに鑑みれば、東大本に近い系統であろうか。料紙の質は低級であり、印行の時期は決して早いものではない。

本書には、所有者によるものと思われる評が少なからず書き入れられており、ある一読者の感想が示されているという

点で興味深い。中でも巻十九「兪伯牙擗琴謝知音」の末尾には、「此時非但士大夫不肯与樵子為友即彼此一樣／稍覺寒微即不能交久之情愈簿マツ愈不足／語也真愧先賢多々矣／石雪子識」と、他の巻に比して詳細な記述がある。⁽⁶⁾

首都図書館本

首都図書館所蔵（J/4257）。十二冊。二四・五×一五・九糎。封面「墨憨齋手定／今古奇觀」。無図。每半葉十一行×二十四字。匡郭二〇・一×一四・一糎。

書型は初期刊本に近いが、序文の「皇明」が擻頭していないことや、本文の誤刻が多いことからして、成立時期は比較的下のものと思われる。

北京大本

北京大學圖書館所蔵（MX/81326/40282）。十六冊。二五・八×一六・二糎。封面欠。無図。每半葉十一行×二十四字。匡郭一九・五×一三・九糎。

每半葉十一行×二十四字の刊本には、本書と前述の首都図書館本のほか、後述の東文研本・京大本等がある。⁽⁷⁾ これら諸本の関係性は未詳であるが、本文の誤刻に一定の共通性が見られる点は注目される。たとえば巻二十一「莊子休鼓盆成大道」において莊生が詠む七絶に「画虎画龍難画骨」という一節があるが、四者ともこれを「画虎画皮難画骨」としているのである。「龍」を「皮」に誤刻した理由は不明だが、たとえば「龍」を略字「龙」に作る刊本があり、それを模刻する際に誤った可能性などが考えられようか。ちなみに、光緒十四年（一八八八）刊の経文堂本（首都図書館〔己/765〕、早稲田大学図書館〔く21/4254/1-12〕等所蔵）にも同様の誤刻がある。

清華大本

清華大學圖書館所藏（庚83/631802）。十六冊。一五・二×一五・七糎。封面欠。口絵二十丁（各巻一図、毎半葉一図。一図）。毎半葉十一行×二十三字。匡郭二一・二×一四・四糎。

口絵は巻十九「龔伯牙琴謝知音」と巻二十「莊子休鼓盆成大道」の順序が逆になっており、同文堂本bの特徴と共通するが、本文の板式・字様はともに同文堂本bとは異なり、口絵のみを利用したものと思われる（同板・異板の別は未調査）。本文は上海本系統に近く、料紙の質なども勘案すると、初期刊本のひとつに数えても差し支えないように思われる。

北師大本a

北京師範大學圖書館所藏（857/4301.08）。十六冊。二四・五×一五・七糎。封面欠。口絵二十丁（各巻一図、毎半葉一図。一図）。毎半葉十一行×二十三字。匡郭二一・二×一四・四糎。

前出の清華大本とはほぼ同様の特徴を持つ。本書もまた初期刊本に位置づけるべきであろう。なお、本書の本文には批点が付打られているが、清華大本にはそれがない。

北師大本b

北京師範大學圖書館所藏（857/4301.010）。十六冊。一六・〇×一〇・六糎。封面「墨憨齋批点／繡像今古音觀」、欄外上辺「同治六年新刻」。口絵二十丁（各巻二図、毎半葉二図）。毎半葉十一行×二十五字。匡郭一一・九×九・四糎。封面の「同治六年」は一八六七年。各篇の単位を「回」とし、全四十回を目錄において十巻に分けているところに特徴がある（巻一…第一〜三回、巻二…第四〜七回、巻三…第八〜十二回、巻四…第十三〜十五回、巻五…第十六〜十八回、

卷六・第十九〜二十三回、卷七・第二十四〜二十七回、卷八・第二十八〜三十三回、卷九・第三十四〜三十六回、卷十・第三十七〜四十回。作品の排列は一般的な刊本と同様。同様の形式を持つ刊本には、維経堂本および後述の国会図書館本・早大本等がある。ただし本書の柱刻は「卷二」から「卷十八」まであり、当然ながら目録とは作品の巻番号が一致しない。

国会図書館本

国立国会図書館所蔵 (18449)。十冊 (合五冊)。一七・二×一一・一糶。封面「道光己酉年重鐫／續像今古／奇觀」。

口絵四十丁 (各巻二図、毎半葉一図)。毎半葉十一行×二十五字。匡郭一一・九×九・七糶。

封面の「道光己酉年」は道光二十九年 (一八四九)。この年に刊行されたことが分かっている刊本には維経堂本があるが、本書はその維経堂本の封面にある書肆名が削られただけのものである。

東大本

東京大学総合図書館所蔵 (E5915)。十冊 (合四冊)。一六・八×一一・一糶。封面「墨憨齋批点／續像今古奇觀」、欄外上辺「同治六年新刻」。口絵二十九丁 (各巻二図、毎半葉一図。卷三〜六・九×十二・十八・二十五・二十七欠)。

毎半葉十一行×二十五字。匡郭一一・八×九・五糶。

目録は前述の北師大本bと同様の形式をとるが、本書の柱刻は「卷二」から「卷四十」まで刻されている。ちなみに柱刻は「今古奇觀 (魚尾) 卷之二 (〜四十) 丁付」となっているが、「之」の字は第一回の第二〜五・九・十丁になく、第三回の第十一丁からはまったく刻されなくなる。また、巻首題は基本的に「第一巻 題名」「第二巻 題名」の形式をとるが、第三十七回のみ「第十卷第三十七巻 題名」となっており、これらの特徴はいずれも維経堂本と一致する。本書と維経堂

本は、封面が異なるのみで、序・目録・口絵・本文はすべて同板の可能性がある。

東文研本

東京大学東洋文化研究所倉石文庫所蔵(41798)。十六冊。二四・七×一五・五糎。封面「墨憨齋手定／今古奇觀」、欄外上辺「乾隆甲辰重鐫」。口絵二十二丁(各巻一図、毎半葉一図。円図)。毎半葉十一行×二十四字。匡郭一九・七×一三・九糎。

封面に「乾隆甲辰重鐫」とあることから、乾隆四十九年(一七八四)の刊本であることが知られる。本書とおそらく同内容の刊本が九州大学附属図書館高瀬文庫(漢・集部⁵⁾)にも存するが、これらの口絵はいずれも「灌園叟晚逢仙女」と「陳御史巧勸金釵鈿」の図が重複(ただし異板)しており、同文堂本cと共通する。本書および高瀬本は同文堂本cと本文の板式を異にするが、口絵が共通する以上、これらの刊本に何らかの関係性はあるものと考えらるべきであろう。前稿ではその点について考察を行い、同文堂本cの成立が東文研本・高瀬本に先行する可能性が高いことを示した。

本文の特徴としては、料紙の節約のためか、詩詞およびその直前の本文が、一行分のスペースに小字で二行書かれる箇所が見える点が見られる。この形式は後述の京大本とも共通するものである。さらに、略字が散見することや誤刻が比較的多いことに鑑みるに、成立の時期は上海本等の初期刊本に後れるものと考えらるべきであろう。これは、遅くとも乾隆年間の特典で、『今古奇觀』が初期刊本から後期刊本への過渡期に入っていたことを示唆するものである。誤刻は目録や巻首題にも及び、目録の巻八「灌園叟晚逢仙女」を「灌園史晚逢仙女」に、巻二十九の巻首題「懷私怨狼僕告主」を「襲私怨狼僕告主」にそれぞれ誤刻する。また、多くの刊本の序文には「迄於皇明文治筆新」の一節が見られるが、本書では「於」が「于」に改められている。

京大本

京都大学文学研究科図書館所蔵(D/V1a.98)。十二冊。二四・二×一五・八厘。封面「墨憨齋手定／今古奇觀」。無図。每半葉十一行×二十四字。匡郭二〇・二×一三・七厘。

目録の一部に略字が用いられている点、目録の巻八「灌園史、晚逢仙女」が「灌園史、晚逢仙女」に、巻二十九の巻首題「懷私怨狼僕告主」が「襲私怨狼僕告主」にそれぞれ誤刻されている点、一行のスペースに二行書かれている箇所が散見する点など、前述の東文研本と同様の特徴を持つ。一方で東文研本にはない誤刻や墨格が多く存していることに鑑みるに、おそらく東文研本と同系統の刊本を覆刻した際、判読不明の文字を墨格としたものであろう。墨格は巻十一に際立って多く、特に第三丁には表裏合わせて七箇所ある。

また、本書には落丁・乱丁が多く見られる。以下、気づいた点を挙げておく。序文、第三丁以降欠。巻八、第四丁落丁。当該箇所には巻十八の第二十四丁が綴じられている。巻二十三、第一丁の前に第三十三丁が綴じられる。第三十三丁は本来の箇所にもあるが、それは第一丁の前に綴じられているものとは異板。巻三十九、第六丁落丁。巻四十、第五丁重複。

早大本

早稲田大学図書館所蔵(〈21/2395/28〉)。七冊(端本)。一七・一×一・〇厘。首巻欠のため封面・図未詳。每半葉十一行×二十五字。匡郭二一・一×九・六厘。

前述のとおり、北師大本bや維経堂本と同様、全四十篇を巻一〜十に分け、各篇を「回」の単位で表す刊本である。冒頭から巻三の第七回までが失われており、おそらく本来は維経堂本同様、全十冊であったかと思われる。早稲田大学図書館蔵書検索システム(WINE)は本書を同治七年(一八六八)刊の青雲楼本としているが、その根拠については不明。筆

者が実見した青雲楼本は首都図書館の所蔵にかかる刊本（丁⁷⁴¹⁵）で、封面に「墨憨齋批点 五雲樓發兌／繡像今古奇觀／青雲樓藏板」、その欄外上辺に「光緒十二年重鐫」とあり（光緒十二年は一八八六年）、口絵二十丁（各巻二図、每半葉一図。巻二十一〜四十欠）を有する。每半葉あたりの文字数は、本書同様十一行×二十五字である。『増補中国通俗小説書目』は、早大本について「〔青雲樓藏板〕（右経堂）（光華堂發兌） 一〇巻 一一×二五 図二〇葉 同治七年刊 小

*奉憲抽禁八回」と記しているが、当時は第一〜三冊も残存していたのであろうか。

なお早稲田大学図書館には、本書とほぼ同内容を持つ刊本（²¹2683²⁸）がもう一点存する。こちらも冒頭から巻三の第七回までが失われた端本で、両者が同本である可能性も存するが、WINDには光緒二年（一八七六）刊本として登録されている。こちらにも、少なくとも現時点の刊本の姿からはその根拠を見出せない。

架蔵本

筆者架蔵本。二冊（端本）。一六・七×二二・〇浬。首巻欠のため封面・図未詳。每半葉十一行×二十四字。匡郭一四・九×九・九浬。

それぞれ巻首に「今古奇觀卷五 灌園叟晚逢仙女」「今古奇觀卷七 劉元普雙生貴子」とある二冊のみ残る。一般的な『今古奇觀』の刊本では、「灌園叟」は巻八、「劉元普」は巻十八に収められる作品であるため、本書の排列が特殊なものであることはこの二冊からでも窺うことができる。独特の排列を行う刊本には、他に同文堂本c・青雲楼本・崇正堂本（京都大学文学研究科図書館所蔵〔D/V1a/9-22〕）等があるが、本書の排列はそのいずれとも異なるようである。一冊に一巻しか収められていないのは分冊のためであろうかと思われるが、詳細は不明。

同文堂本追考

冒頭にも述べたとおり、初期刊本と後期刊本の過渡期に成立したと見られるのが、同文堂本bとcである。bは封面に「墨憨齋手定／重訂今古／奇觀 同文堂藏板」、欄外上辺「繡像全本」、本文部分の板心に「同文堂」と刻されているもので、板木作製と刊行のいずれをも同文堂が担った刊本と考えてよい。口絵は各巻一図の円図で、巻十九「兪伯牙擗琴謝知音」と巻二十「莊子休鼓盆成大道」の順序が逆になっている点が特徴である。一方のcは本文部分の板心に「同文堂」の文字はあるものの（bとは異板）、封面には「墨憨齋先生手定／繡像今古／奇觀」とあるのみで、実際の販売は同文堂以外の書肆が担った可能性が想定される。こちらは作品の排列が一般的な『今古奇觀』とは異なり、本来巻七の「売油郎独占花魁」が巻三十九、巻三十九の「誇妙術丹客提金」が巻二十三、巻二十三の「蔣興哥重会珍珠衫」が巻四十、巻四十の「運錢多白丁横帯」が巻七にそれぞれ配されている。また、口絵の図柄および排列はbと共通するものの（ただし異板）、巻八「灌園叟晚逢仙女」と巻二十四「陳御史巧勘金釵鈿」の口絵が重複し、全二十一葉となっている（重複する巻の図柄は共通するが異板）。

前稿では前述の東文研本・高瀬本との関係をも踏まえつつ、これら二種の成立順序について検討したのであるが、今回、成立時期がこの二種の間に位置するのではないかと思われる刊本を新たに調査し得たので、ここに報告しておきたい。まずは以下に書誌を示す。

東京大学東洋文化研究所蔵（集・詞曲）稗官（372）。十二冊。二四・六×一五・七糎。封面「繡像今古／奇觀」、欄外上辺「墨憨齋手定」。口絵二十丁（各巻一図、每半葉一図。円図）。每半葉十二行×二十七字。匡郭二〇・五×一四・八

纏。本文部分の板心に「同文堂」と刻される。

本書の口絵もやはり巻十九と巻二十の順序が逆転しており、同文堂本bに一致する。一方、作品の排列は同文堂本cと一致しており、まさに同文堂本bとc双方の特徴を備える刊本である。ちなみに封面はb・cいずれとも一致しない。「増補中国通俗小説書目」の「同文堂刊本」の項には、「封面には墨愍齋先生手定の文字を縦書きするものと墨愍齋手定の文字を横書きするものがある。前者は図二一葉、後者は図二〇葉を有する」とあるが、筆者が前稿までに確認していた「図二〇葉を有する」同文堂本は、「墨愍齋手定」を縦書きする同文堂本bのみであり、本書は管見に入っていなかった。

ここであらためて、すべての同文堂本の書誌的特徴について整理しておく。なお、右に紹介した東洋文化研究所蔵本については、仮に「同文堂本b」と称することとする。

同文堂本a

封面「墨愍齋手定／重訂今古／奇観 同文堂藏板」、欄外上辺「繡像全本」。口絵十六丁（各巻二図、毎半葉二図。巻五）八欠。毎半葉十一行×二十三字。

同文堂本b

封面「墨愍齋手定／重訂今古／奇観 同文堂藏板」、欄外上辺「繡像全本」。口絵二十丁（各巻一図、毎半葉一図。円図）。毎半葉十二行×二十七字。

同文堂本b

封面「繡像今古／奇観」、欄外上辺「墨愍齋手定」。口絵二十丁（各巻一図、毎半葉一図。円図）。毎半葉十二行×二十

七字。

同文堂本c

封面「墨憨齋先生手定／繡像今古／奇觀」。口絵二十丁（各巻一図、毎半葉一図。ただし「灌園叟晚逢仙女」と「陳御史巧勘金釵鈿」の図が重複。円図）。毎半葉十二行×二十七字。

同文堂本d^⑧

封面「墨憨齋手定／繡像今古／奇觀 同文堂梓行」。無図。毎半葉十二行×三十字。

これら諸本の性格および成立の順序に関する筆者の見解は、現時点で特に前稿と変わりはなく、bとcの間にbが存在していたことを新たに付け加えるに留まるが、同文堂本bと図柄が一致する会成堂本aとの関係性、同文堂本cが口絵二図を重複させた理由（しかもそれは異板である）、同じく同文堂本cが作品の排列をわざわざ改めた理由、書肆不明の東文研本（41798）および高瀬本との関係性、そして今回はじめて調査した同文堂本bのより詳細な性格など、今後検討すべき課題はなお多く残されている。

なお、同文堂本dには対校の跡が見られるが、これについては第十二冊に「此本訛謬極多、今以不匱堂所藏大字本對校且点句讀云。弘化二年乙巳冬十一月念七日 今古園主人」という識語が存することから、今古園主人なる人物が不匱堂から借り出した大字本によって行ったものであることが知られる。この識語の内容に関してはすでに大塚秀高・王佳による調査があり、それによれば今古園主人は医師の平出順益（文化六年（一八〇九）→文久元年（一八六一）、不匱堂は柴田景浩に始まる柴田家の屋号で、順益が「今古奇観」を借り受けた当時の当主は柴田承慶とのことである。不匱堂本は現存未詳だが、大塚・王によれば、これはもともと沢田一齋が「小説粹言」巻二「転運漢巧遇洞庭紅」と巻五「襲私怨狼僕告

主^①」の版下作成時に依拠した刊本で、その後、一齋の孫の六代目風月堂莊左衛門が不置堂に売却したものである可能性が高いという。

おわりに

本稿では、拙稿「『今古奇観』諸本考」において言及することの少なわなかつた本衞藏板本・書肆不明本の書誌を紹介することに主眼を置き、それに加えて、前稿に対する若干の追考を行った。注目されるのは、ある刊本の覆刻本・模刻本と目されるものが、複数の書肆から刊行される例が多数見受けられる点である。

版權の確立していなかつた明清の中国においては、書肆の営利を侵害する許可なき翻版が深刻な問題となっていた。それを防ぐために、明末の余象斗や袁無涯が自ら刊行する書物に警告文を附したことが井上進によって紹介されているが^②、すべての書肆がそうした行動を取っていたわけではなからうし、取ったとしてもどれほどの効果があつたものかは疑わしい。少なくとも、そうした警告文が附載された『今古奇観』の刊本は、いまだ管見に入っていない。

しかしそれは、必ずしも無秩序的な覆刻・模刻が看過されていたことを意味するものではないだろう。本衞藏板本の中には、書肆が裁判沙汰を避けるため、あえて「本衞藏板」と銘打つたものがあるという沈律の見解を先に紹介したが、この指摘のとおりであれば、『今古奇観』の諸本に本衞藏板本および書肆不明本が多いのも、同様の理由のためではないかと推測されるのである。言うまでもなく、それは『今古奇観』が多くの利益を生み出す商品であつたことを意味している。

前稿および本稿において『今古奇観』諸本の関係性を縷述してきたが、未見の刊本はなお多く、その全貌の把握にはいまだ遠く及ばない。また、筆者の調査不足により、本稿の記述が中途半端なものに終始したことも慚愧に堪えない。しか

し、数多くの異本が存し、伝本の所在についても不明な点の多い本作の諸本研究を進展させるためには、こうした「経過報告」を蓄積していくほかに不足である。そしてまた、こうした多様な諸本の存在が、後世の中国文学およびそれを受容した日本文学に何をもたらしたのかということも、重要な検討課題として残っている。

注

- (1) 拙著『白話小説の時代―日本近世中期文学の研究―』（汲古書院、平成三十一年）第一部第一章。
- (2) ただし大塚秀高「『今古奇観』から見た三言二拍」（『和漢語文研究』第十三号、平成二十七年十一月）は、成立の順序について筆者とは異なる見解を示している。
- (3) 本の綴じ方によって、匡郭横寸の正確な採寸がかなわなかったものが一部あり、それらについては概数を示さざるを得なかった。
- (4) 王汝梅校注『皋鶴堂批評第一奇書金瓶梅』（吉林大学出版社、一九九四年）。
- (5) 沈律「説「本衙藏板」」（淡江大学中文系・漢語文化暨文献資源研究所編『昌彼得教授八秩晋五寿慶論文集』、台湾学生書局、二〇〇五年）。
- (6) 「石雪子」の号は、陳乃乾編『室名別号索引』（中華書局、一九五七年）、陳德芸『古今人物別名索引』（芸文印書館、一九七七年）等には見えない。
- (7) 後述する筆者架蔵本の板式もまた每半葉十一行×二十四字であるが、卷二十が失われているため、ここには挙げない。

(8) 前稿において本書の表紙の縦寸を一八・九糎と記したが、一八・五糎の誤りであったのでここに訂正する。

(9) 大塚秀高・王佳「『小説粹言』の依拠した白話短篇小説集―不匱堂本『今古奇観』と『小説選言』―」(『中国古典小説研究』第十八号、平成二十六年三月)。

(10) 封面には「懷私怨狼僕告主翁」とあるが、巻首題は「襲私怨狼僕告主」となっている。書肆不明本の東文研本・京大本の項にも記したとおり、一字目を「襲」とする『今古奇観』(管見の限り、いずれも後期刊本)は複数存する。封面に記された題の最終字「翁」については、他の回に合わせて八字題にするため加えられたものであるうとの見解が、注9大塚・王論文に示されている。

(11) 井上進「中国出版文化史―書物世界と知の風景―」(名古屋大学出版会、平成十四年)第十四章「書籍業界の新紀元」。

【附記】資料の閲覧に際してご高配を賜った所蔵機関の方々に、心よりお礼申し上げます。なお、本稿は令和元年度科学

研究費補助金(若手研究・19K13078)による成果の一部です。

